
車をぶつけて逃げました

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

車をぶつけて逃げました

【Nコード】

N9556C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

学生時代に実際にあったできごとです。できるだけ事実そのままになるように描いています。　そういう経験、ありますか？

車をぶつけて逃げました

その日（前書き）

筆者の実話です。

風化させてはならないという一心で文章にしました。これを読んで不快な思いになる方がいらっしゃいましたら、深くお詫び申し上げます。

少しでも、何か心に触るものがあれば幸いです。

車をぶつけて逃げました

その日

罪を、犯した。

忘れられないし、忘れてはいけないと思う。

大学三年生、季節は覚えていない。

ただ、雨が降っていた。それだけは、よく覚えている。

「パンフレットだけもらっても、どうせ見ないのにね」

「でも、もらわないのも不安っていうか」

「あはは、わかる」

そんな他愛のない話をしながら、友人と二人、学内の駐車場に向かっていった。

大学内で行われた、就職説明会の帰りだった。手当たり次第に企業のパンフレットをもらい、それだけで就職活動をしたような気になって、重くなった鞆を抱えながら、傘を差していた。私の家は、大学から車で二十分。下宿している友人のアパートは、歩いても十分とかわらない。それでも、雨だからと、車に乗るように勧めた。

「いいのに、送ってくれなくても」

「ついでだよ。その代わり、運転は荒いよ」

車に乗り始めて、一年と少し。運転は嫌いではない。

タイヤ止めの一つもない、砂利の駐車場の真ん中に、私の車は停めてあった。学生のマナーなどたかが知れていて、無秩序に置かれた車と自転車で、出入り口がひどく狭くなっている。

普段は、こんな難易度の高いところには停めないのだが、今日は説明会の会場に近いということで、特別だった。

エンジンをかける。雨のせいで、視界が悪い。

ゆっくりとアクセルを踏みながら、ハンドルを切った。今にも、

左右の車にぶつかりそうだ。

「こっちは大丈夫」

友人が見てくれている。油断はせずに、出口にさしかかる。

車一台通るのが、ぎりぎりの広さだった。嫌な予感、した。

がりがり、と、鈍い音。

「あー……」

うめき声が漏れた。

「ぶつかってる、ぶつかってる！」

「ちょ、どうしよう」

ハンドルを切る。戻ればいいのか、進めばいいのかわからない。

おかしな方向にハンドルを切ってしまったのか、車体はますます食い込んで、アクセルを踏んでも容易には動かないほどになっていた。がりがり、めりめりと、嫌な音。嫌な衝撃が、こちら側の車体も揺らす。

どうにか脱出したとき、ぶつけてしまった車がどうなっているのか、私は見なかった。音と感触でわかる。ちょっとこすっちゃった、程度ではない。

とりあえず駐車場から出て、一度車を止めようとした。

たぶん、このときにはもう、頭のなかは真っ白になっていた。

「どうするの、結構こすったよ」

そんなことはわかつている。

けど、考えられない。

どうする？

持ち主の姿は？

ここで待つ？

雨なのに？

どうするの？

どうするの？

ほとんど無意識に、アクセルを踏んでいた。とにかく、一刻も早く、この無関係な友人を降ろそうとした、のだと思う。彼女の

車をぶつけて逃げました

ことを思つてとか、そういうことではない。とにかく一人にならないと、何も考えられないと思つた。

アパートまで来て、彼女を降ろした。そのこと自体が、重大な過ちだった。構内から出てしまったのだ。そうなつてしまえば、もう、車を揺らした衝撃の、あの生々しい記憶が、ほんの少し、薄れてしまつていた。

しかし、その「少し」で、充分だった。

そうして、私はそのまま帰路についた。

頭のなかは真っ白だったが、奇妙に冷静だった。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう。

……ダレカミテタ？

……ダレカにキツカレタ？

家に帰り着いた私は、できるだけ普通であらうとしていた。

どういふ心理状態だったのだろう。自分をごまかすことで、事実そのものをごまかしたかつたのかもしれない。

当然、父が、無惨に形の変わった車を見とがめ、どうしたのかと尋ねてきた。

きた、と思つた。

しかし、口から出た声は、驚くほどいつもどおりだった。

「あー、電信柱にぶつけちゃつた。すごいショック。直そうと思つたら、お金かかるよねえ」

心臓が、頭の中で鳴つてるみたいに、がんがんと音をたてていた。それでも多分、そんな動揺は外からは伝わらなかつたのだろう。父はそれ以上は追求せず、車のことは父に任せている母も、何もいつてこなかつた。

その日、当たり前のように、夕食をとつた。

車をぶつけて逃げました

あんなことがあって、絶対に食事なんかできないと思ったのに。そこまで無神経ではないと思っていたのに。

車をぶつけて、そのまま逃げてきたことが、どれほど卑怯なことかはわかっていた。なのに、早鐘のようだった鼓動が、少しずつ落ち着いていくのを、感じていた。

ぞつとした。

それでも、お腹は空くのだ。

それでも、眠くなるのだ。

それでも、私が生きていくこの日常自体は、何も変わらないのだ。

その日（後書き）

書いている間はずっと憂鬱でした。

車をぶつけて逃げました

次の日

翌朝、つぶれたように傷ついている車を見て、少しためらったが、結局いつもどおり、私は車で登校した。校舎からは少し遠いが、その代わり混雑しない、いつもの駐車場に停める。

昨日、ずっと私の胸を叩いていた心臓は、今日はもうだいぶおとなしくなっていた。それでも、罪悪感のような、後ろめたさのような……ひどく心臓に悪いスリルのようなものが、体内を巡っていた。心臓が、胸のずっと上の方にあつて、ちょっとした衝撃で口から出てくるのではないか、というような感覚だった。

怖い、のかもしれない。

それでも私は、普通であることにしがみつき、必要以上に当たり前に講義を受けた。友人との会話にもそつなく応じる。昨日のことを誰かに話そう、という気にはなれなかった。昨日、現場にいた友人とも、その話は一切しなかった。

日常が動いたのは、昼休みだ。

携帯電話が鳴った。びくり、とした。

「ちよつと、電話みたい。出てくるね」

「……大丈夫？」

様子がおかしかったのだろうか。昨日一緒だった友人とは別の子が、心配そうに声をかけてくる。返事をする余裕はない。

食堂から出て、人気のないところで、電話をとった。父からだ。

「おまえ、昨日の車……ぶつけたの、電信柱じゃないのか。警察から、家に電話があつた」

警察

ふつと、一気に、熱が引いた。ずいぶん遅れて、冷や汗が垂れた。どう返事をしたかは覚えていない。たぶん、たいしたことはないえなかつたのだと思う。

とにかくすぐ帰ってこい　そんなようなことをいわれたのか、

ともかく私は友人のところへ戻り、午後の授業は休む旨を告げると、車へ急いだ。走るようにして、駐車場にたどり着く。

フロントガラスに張ってある大きな紙を見て、泣きそうになった。すぐに下記に電話を　という内容と、電話番号。市の警察署の名前が書かれている。

電話をすると、すぐに来い、といわれた。

真っ白な頭で、車に乗った。

ハンドルを握っていると、涙がどんどん溢れてきた。

当たり前のように、平和に流れてくるカーステレオの音にいらだち、音という音はすべて切って、窓も全部開け放ち、しゃくり上げながら運転した。

全身が熱を発しているみたいに、カアアと熱くなっていた。

涙は、悲しいとか辛いとか、そういうことではなくて、ただ体内の水分が沸騰して、どんどん溢れてきているようだった。

なんて馬鹿なことをしたんだろう。

何度も何度も、自分を責めた。

なんで逃げてしまったんだろう。

なんで逃げてしまったんだろう。

なんで逃げてしまったんだろう。

警察署に到着して、車のなかで、私は懸命に涙を拭いた。

泣いていてはいけないと思った。

私は、加害者であって、被害者ではない。私は決して、かわいそうではない。

私が泣くのは卑怯だ。

車をぶつけられた人が、私が泣いているのを見たらどう思う？

憤るに決まっている。

ふざけるな、と思うに決まっている。

泣きやめ、泣きやめ　呪文のようにつぶやいて、ハンドタオルで乱暴に顔を拭い、車から出た。入り口で、無表情な警察官の一人

に、こちらは無表情に事情を話し、案内されるままに奥の部屋へ進んだ。

「……失礼します」

一声かけて、部屋に入った。この期に及んで、模範的であろうとしている自分に少し呆れたが、私は本来、こういう人間なのだと思います。思い出して、自嘲した。

この状況で、そんなことは何の自慢にもならない。

「ああ……はい、座って」

促され、無機質な、細長い白い机の前の、パイプ椅子のようなものに腰をおろした。部屋自体は狭くはないのだろうが、こつこつて話をするためか、長机で空間が仕切られている。ロッカーや壁など、至るところに張り紙がしてある、雑多な印象の部屋だった。

億劫そうに首を回しながら、一人の警察官が私の前に座った。

「あなたね、自分が何をしたかわかる？」

息が止まりそうになった。はい、としっかり声にしたつもりが、小さな囁きになっていた。

「状況をね、説明してもらえるかな。どこに車が置いてあって、どういうふうにぶつけたの」

事務的な、淡々としたいい方。どちらかというと、面倒そうだ。

紙とペンを渡されたので、私はできるだけ詳細に思い出しながら、駐車場の図を書いた。

私がぶつけてしまったあの車は、出入り口を半分塞ぐように駐車されていた。その反対側には自転車が並び、ひどく出にくい状況になっていたことを、そのとおり、書いた。

自分を弁護したい気持ちもあったのだろう。私が悪いけど、向こうのマナーも悪いでしょ。そんなことはいわなかったが、そう思われたかったのだ。

どこまでも狡い。最初は逃げて、今度は自分を被害者にするつもりか。

「じゃあ、自転車の方にぶつけたらまだよかったのにねえ。相手の

車をぶつけて逃げました

車の停める位置もよくないけどね、とはいっても、駐車禁止の場所に停めてあったとか、そういうのじゃないからねえ」

正論を、ごく当たり前に告げられる。そのままのテンションで、彼は続けた。

「そのね、がりがりやってるところを、車の持ち主の友人が見ててね、君の車のナンバーをメモしてたんだよ」

頭のなかぐるぐるした。

で、君は逃げちゃったんだよね

そんなようなことをいわれたときに、自分のことを卑怯者だと感じる部分とは、別の部分がむくむくとふくらんできた。

そうして、私という形にまで成長したもう一人の自分が、私の説得を始めた。

ねえ、私、そんなに卑怯？

だって、思い出して。

私は、ぶつけるつもりなんてなかった。

その場に持ち主がいなくて、混乱して、そこから離れてしまった。逃げようなんて思っていなかった。

背中を押されるようにして、私は口を開けた。

「だって、逃げたって、逃げ切れると思うほど、バカじゃないです。いつも人がいっぱいいる場所です。誰かが見てることなんて、わかってました。逃げるとか逃げないではなくて、とにかく気が動転して、その場から離れてしまったんです」

自分ではない自分が、急に顔を上げて、そんなことを口走っていた。

不思議なことに、その声を聞いていると、自分がどんどん丸め込まれていくようだった。

自分は確かに悪いが、根本部分では悪くないような気さえしてきた。

もう一人の自分は、震える声で 妙に可哀想な声で、続けた。

「どつしよどつしよつって、家に帰ってしまったてから気が気じゃなくて、一睡もできませんでした。なんで帰ってきちゃったんだろうって。でも、今更大学に戻っても、どんな車だったか覚えてないし、持ち主もわからないし……」

私のなかで、私がゆっくりと塗り替えられていった。

自分を庇護する虚言が、真実に変わっていくのをはつきりと感じた。

そつだ、昨日は一睡もできなかったんだ。

どうやって謝ろうかと、ずっと考えてたんだ。

「こうやって、向こうから見つけてくれて、よかったです……これで、ちゃんと謝って、弁償できます……許されるとは思ってないけど、よかった……」

警察官のため息が、妙に耳についた。

そのため息は、どういう意味だろう。

「それでもね、眠れない日なんて一日二日で、そんな日はすぐに過ぎて、だんだん忘れていったんだろ。こうやって、警察に呼ばれでもしなきゃ、そんなことあったっけ、ってね」

ズキンとした。

そのとおりなのだろう。

「本当はね、大学の構内で起こったことに、警察は出てこないんだよ。公共の道路とかじゃないからね。ただ、今回は相手がこっちに連絡してきちゃったから、例外だね」

その後、書類に名前を書かされ、事務的な手続きをした。

外に持ち主がいるから、ちゃんと話し合っつてね、といわれ、外に出た。

男の子だった。

顔を見て、一気に涙が溢れて、私は子どもみたいに泣き出した。

私が悪いとか、悪くないとか、そんな理屈はどこかに吹っ飛んでしまった。

泣いちゃだめ、となけなしの理性が命令するが、しゃくりあげるのがどうしてもおさまらず、切れ切れの声で謝罪の言葉を何度も吐いた。

相手の表情は見なかった。

ただ、どうにか携帯番号と名前の交換をしたような気がする。保険会社に電話をしたのだろうか。そのあたりのことは、まったく覚えていない。

とにかく私はずっと泣いていた。

弁解をする余裕も、被害者ぶる余裕も、あるはずがなかった。悔いる涙と、謝罪の言葉を、ずっと垂れ流した。

家に帰ると、父は一言、大変だったな、といった。

もともと感情的な母は、ひどく取り乱して泣いていた。

「どうして、そんなこと」

「娘が犯罪者になるなんて」

「いつの間に、そんな子になっちゃったの」

「お母さんは、悲しい、悲しい、悲しい」

すでに自分と一つになったもう一人の自分が、警察署でしたような話を繰り返した。

自分を庇護しているのだと悟られないように、注意深く心理描写を省いた。

自分の狡猾さには、もう気づかなくなっていた。

次の日（後書き）

読み返しても憂鬱に……。
あと二回ほど続きます。

車をぶつけて逃げました

その次の日

どれだけ悔いていても、人は眠れるのだと思った。
浅い、深いの問題ではない。

少しでも寝てしまったことに、自嘲した。

生きていくのに必要なことは、やはりどうあがいても必要なのだ。自分は悪くないのだとする自分は、すでに揺るぎないところに居座っていたが、それでももちろん、しでかしたことの重大さが変わるわけではない。

私は、ひどく凪いだ気持ちで、道を歩いていた。

昨日のうちに、父が相手宅に電話をかけ、今夜謝罪に行くということまで話をつけたら良かった。

手みやげを持っていけばいいという問題ではないが、手ぶらで行くのも非常識なので、私が和菓子屋まで行くことになった。

いつもなら自転車に乗る距離だったが、あえて、交通量の多い道をゆっくり歩いた。

すぐ近くを走り抜ける車を目で追いながら、ふと、轢いてくれな
いかな、と思った。

被害者の方が良かった。

そうすれば、こんな思いはしないですんだ。

誰だって、加害者が悪いというけれど、本当にそうなのだろうか。
わざとやったわけじゃない人だって、いつぱいいるでしょう？

ものすごく悔いている人だっているでしょう？

そんな身勝手なことを、何度も、考えた。

ねえ、誰か、私を轢いて。

そのまま、逃げたっていい。

私、笑って、あなたを許してあげる。

いっぱい苦しんだんでしょ？ もういいよ。

実はね、私も、同じようなことをしちゃったの。ね、お互いさまだね

現実には、何事もなく和菓子屋に着いた。私は迷わず、一番高くて豪華な、箱入りのセットを買った。

そうして、また、ふらふらと歩き出す。

このままどこかに行ってしまうおうかとも思った。もちろん、そんな勇気があるはずもなかった。

夜になり、父の車に乗せられ、父と二人で男の子の家に向かった。

目がくらむような豪邸だった。

門を開けて、石の道を歩いて、やっと玄関。大きな庭と、離れにもう一つ建物がある。

ガレージに車が停められていて、そのときになって、やっと惨状を見た。

右側のライトがひび割れ、むき出しになっていた。周りは完全にえぐれて、骨組みが露わになっている。

「こりゃひどいな」

私を気遣ったのか、父のつぶやきには感情は込められていなかったが、それでも胸に突き刺さった。

実際、ひどい有様だ。あの男の子は、この車を見てどんなにショックだったろう。

深呼吸をして、インターホンを押す。応接間のような部屋に通された。

私はすぐさま頭を下げた。そのまま、男の子の顔も、その母親の

顔も見られなくて、ずっとうつむいていた。合わせる顔がない、というよりは、見られたくなかった。

「このたびは、うちの娘が大変なことをしでかしまして、本当に申し訳ありませんでした。娘も、初めてのことで気が動転して、そこから離れてしまったんですが……まあ、なんとというか、このまま逃げてしまおうってんではなくて、悪気はなかったんですわ」

車関係の職に就いている父は、謝罪と、事情の説明を、慣れた様子で言葉にした。

「これは、ほんの気持ちですが」

それから、菓子折と、幾らか包んだ封筒を差し出した。

男の子も、母親も、落ち着いていた。まだ若いんだし、そういうこともありますよね、というようなことをいわれた。優しい声だったが、それでも顔は上げられなかった。とにかく、今度こそ泣かないようにと、そればかり必死に考えていた。

その後、どういうわけか、父は世間話のようなものを始めた。何年生なんですか、何かサークルを？ ああ、そうなんですか……ところで、立派なお家ですね、車は新車だったんですか、中古？ そうですか、それならまだ、ねえ……

数十分が、一生分ぐらいに、長く感じられた。

私は、失礼にならない程度に、ほんの数回顔を上げたが、そこにいる間中、ずっと見られているような気がしていた。

「そんなに、気になさらないでくださいね。もう、終わったことですから」

男の子の母親から、そんな声さえかけられた。

とうとう涙が出てきて、隠すようにハンカチで目を押さえた。

私は謝罪しただけで、それ以外はできるだけ口を開かなかった。いいわけがましく何かを口走って、相手を不快にするのも嫌だったし、かといって父のように、当たり障りのない話を平然とするような立場でもなかった。

正直なところ、私の周りでどんな会話が展開されていたのか、あ

まり覚えていない。ただ、ずっと、震えるように小さくなって座っていた。早く終わらないかな、などと、大それたことも考えなかった。

そこに、あるだけだった。

帰りの車のなかで、恐らく意識してなのだろう、父が軽口をたたき、私も意識して、それに言葉を返した。内容なんて、覚えていないけれど。それでも、どうしようもないような重苦しい空気ではなかったと思う。

黒い景色が逆流していくのを、ぼんやりと眺めながら、これで終わるのかな、と思った。

そう、きつと、これで終わるのだ。

終わりが、来たのだ。

そう思ったときに、突如、警察署での言葉が、脳裏に蘇った。

それでもね、眠れない日なんて一日二日で、そんな日はすぐに過ぎて、だんだん忘れていったんだろ。こうやって、警察に呼ばれでもしなきゃ、そんなことあつたっけ、ってね

終わったはずなのに、胸が痛んだ。

一つの疑問が、ずしりと、胸の内に落ちた。

一体、何が、「終わった」のだろう？

その次の日（後書き）

あと一回。

車をぶつけて逃げました

その後

あの出来事から、五年が過ぎた。

私は、結婚し、子どもも生まれ、絵に描いたような幸せな暮らしをしている。

不満など、何一つない。

あのときは、この世の終わりが来たような気になっていたが、いまこうして、当時のことを思い出しても、あの鋭い痛みは、もうどうやっても蘇らない。

「忘れて」しまったのだ。

どうしようもなく、思い出せないのだ。

それでも、あのときの問いは、未だ、私のなかにある。

あの日、一体、何が「終わった」のだろう、と。

警察署に呼ばれ、自分がやったのだと認め、持ち主に謝ってそれで、何が終わったのだろう。

結局、胸のもやもやが晴れました、程度の終わりですが、なかったのではないだろうか。

罪とはなんだろう。

裁きとは、なんなのだろう。

どんな罪を犯しても、裁きを受ければ「終わる」のだろうか？

何をして、許してもらえば、「終わる」のだろうか？

決して、そうでは、ないはずだ。

物なら、壊しても直るかも知れない。

しかし、被害者、加害者両方の心に、どうやっても、事実は残る。終わりなど、どうやっても、来るはずがないのだ。

だからずっと罪の意識に嘔まれなければならない、というのでは、決してない。

ただ、「終わった」などという愚かな勘違いだけは、してはなら

ない。

悔いていようが悔いていなかろうが、裁きを受けようが受けまいが、事実そのものには何ら違いはないのだ。

悔いているから、それでいい。裁きを受けたから、もう終わったことだ。そういうことでは、ないはずだ。

胸を張って、いえる。

私はいま、幸せだ。

ただ、あ那时的痛みは、やはり忘れてはいけないと思う。

どうあがいても、あの鮮明な痛みは蘇らないが、それでも、一生、私は思い出すだろう。決して、忘れないだろう。

それが償いだというのではない。

それが、加害者の義務だと思うからだ。

その後（後書き）

終わります。

ありがとうございました。心から感謝いたします。

車をぶつけて逃げました

車をぶつけて逃げました

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556c/>

車をぶつけて逃げました

2009年4月24日05時03分発行